

# 神奈川支部情報

第20号 発行日 2011年1月12日

<発行者> 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部  
<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263  
e-mail [kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp](mailto:kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp)  
郵便振込口座 00190-2-114578

## 第9回神奈川証言集会報告<その2>

前号に引き続いて、11月7日に開催した第9回証言集会の報告です。第1部では97才の絵鳩さんの「<証言>戦争犯罪人から人間への軌跡」については前号で報告しました。「実的刺突」の話や「人間魚雷探知機」の話や、シベリア体験、撫順戦犯管理所での「鬼から人間への転変」について、じつにしっかりとした記憶にもとづいたお話をしていただきました。

第2部の森達也さんの講演を本号と次号に引き続いて報告します。

森達也さんの肩書きは集会のチラシでは「作家、映画監督」と紹介していますが、最近の森さんの著作の数や定期、不定期含めて多くの雑誌の執筆、シンポジウム、講演会への出演など、超多忙な中で私たちのようなちっぽけな市民組織の無謀とも思えるお願いを森さんへは快くひき受けてくださいました。

森さんは普段から絵鳩さんたち中国帰還者連絡会(中帰連)の存在とその方たちの活動を理解し、評価していただいていたことから、本集会への参加につながっていただいたのだと思います。森さんは第1部の絵鳩さんの証言のときから、終了後の関係者の懇親会まで、長時間お付き合いをしてくださりました。森さんの心遣いにも感謝します。

森達也さんは映画「A」を撮る過程でオウム真理教の人たちが、「フツーの人間」であったこと、みんな純真、純粹で素直な人たちで、自分の周りにいる人たちと少しも変わっていない、ということでした。

しかし、メディアは彼らを「凶暴、凶悪な人間」として、あるいは「麻原に洗脳されたロボット人間」としてしか見ようとせず、したがってなぜあのような事件が起こるのかの本質は見えなくなっている。メディアにとってはそもそも彼らを「凶暴凶悪な人間」でなければ困るのだ。それはなぜか、ということをお話されました。

ノルウェーでの刑務所を見学して、犯罪者に対する厳罰主義の誤りを見てこられた報告もありました。絵鳩さんたち中帰連の方たちが撫順と太原の戦犯管理所で、当時の中国共産党が受けた待遇に通じる、まさに「目からうろこ」の話でした。

## 世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい

### オウムの人たちは 「普通の人」たちだった

絵鳩さんのお話を聞かれた皆さんは、その余韻を残しつつ帰宅された方がいいのではないかという思いを残しつつ演壇に上がってしまいました。

最初、簡単な自己紹介から始めます。私はそもそもがテレビのディレクターでした。テレビでドキュメンタリー系の報道系を中心にディレクターをやっていました。15年前の95年にオウム真理教の地下鉄サリン事件が起きた年に、オウム真理教の信者たちのドキュメンタリーを撮りました。1年で放送するはずだったのですがロケが終わった段階で撮影中止を言い渡されました。当時、デジタルカメラが出始めたばかりのときだったので、これ幸いと思ってデジタルカメラを使って、一人で休み時間を利用してオウムの施設に通って撮影をしていましたら、部下が首になってしまいました。共同テレビジョンという番組製作会社に籍を置いていました。業界でも最大手の製作会社で「食いしん坊ばんざい」という番組やドラマをつくっていた会社ですけれど、森達也とこの作品は極めて危険である、ということで僕自身もクビになってしまいました。ド

キュメンタリーは結果的にフジテレビがダメならばテレビ朝日とか日本テレビとかNHKなど、どこかで放送ができるかどうか、内心は不安視しながら撮影を続けて、持ち歩いたのですがどこでもダメなのです。だが、どこからもOKがもらえず、自主的な映画に編集しまして、「A」というアルファベット一文字の映画にしました。そのときの作品です。

テレビで放送したかったのですが、テレビで受け入れてもらえないので映画になって、そのあとで「A2」という作品も撮るということになったのですが、どちらもお客さんがほとんど来てくれなかったものですから、焼畑農民のような人生を送ることになるのですが、この辺まで話をしたところで今まででしたら「『A』か『A2』を見られた方は何人いらっしゃいますか」と聞くのですが、今日は聞きません。なぜかというとこれを聞くと、聞いてから聞かなければよかったなあ、と思うのです。何人か手を挙げてくれたのでたぶん数人は見てくれたと思います。今日のような集会ではそのようなことに興味を持つ方がかなりおられると思うのですが、同時に年配の方に評判が悪い、というかオウム真理教というものを見たくもないし、聞き

たくもないし、東京で上映したのですがドキュメンタリーファンはかなりいるはずなのですが、「A」という映画のときはそのドキュメンタリーファンがほとんど来てくれませんでした。オウムと名がつくだけで来てくれなかったのですね。

それはもう、95年、96年のものすごい報道を皆さんも記憶されていると思います。一例を挙げますが95年の3月20日から3ヶ月間、スポーツ紙はすべて一面に野球とかサッカーの記事が一回も載らなかったのです。全部オウム一色です。今のは一例ですが、テレビは朝から晩までオウムの番組ばかりですね。雑誌なども含めてどれほどの報道量があったのかというと、当然その反作用もあると思います。

結果的にはオウムのドキュメンタリーを撮ったばかりに僕はテレビ部門から排除されて現在に至るわけですが、ポイントはなぜ撮り始めていた、オウム信者を撮っていたドキュメンタリーがテレビというマスメディアから排除されたのか、危険視されたのか、なのです。そのことを当時僕はきっとよく分かっていなかったのだと思います。今はわかります。なぜかというと、映画を見た方の感想を何度も聞いていますから。先ほど手を挙げた方の感想を言ってもらってもいいのですが、時間の都合もあるので代弁します。映画「A」を見た人が真っ先に仰ることは、「オウムの信者があれほどに普通だったことは知りませ

んでした」、ということです。「普通」という定義も難しいですが、僕、森達也よりも彼ら、オウム信者は純真です。善良です。優しいです。このことは映画を見ればすぐに分かることですが、これは当時の、今のマスメディアにおいて、テレビにおいて、そのことは出してはいけない部分だったのですね。もしかしたら現在形なのかも知れない。



## 「殺人集団」「ロボット集団」 としか報道しないマスコミ

つまり当時の、今もメディアはオウムを扱う場合、オウムの表し方は二つしかない。ひとつは「共謀凶悪な殺人集団」、もう一つは「麻原に洗脳されて自分を失ったロボット集団」のどちらかです。オウムは語られない。これ以外の語られ方はできない。たぶん、そのことを局の上層部は察知されてしまったのだろう。

ではなぜ、メディア全般ですが、特にテレビではそのような語られ方をしたのか、つまりオウム信者は普通なのだ、という語り方をしてしまったら視聴者からものすごい抗議が来るだろうし、当然、視聴率も下がる。スポ

ンサーからも抗議され、スポンサーを降りてしまうかも知れない。たぶん捜査側からも苦情が来る。場合によっては捜査側だけでなく、テレビ局の株主総会でも問題になるでしょう。ではなぜ「オウムの信者は普通の人間である」ということが一般の人たち、一般の人たちに代表される社会全般が同意できないのか。

普通であるということに同意すれば自分たちが問われるということなのです。それは許せない。あれほどの凶悪な事件をおこした彼らは自分たちと同じはずはない、彼らは自分たちと違う存在である、そう思いたい。そうであるべきだ。そういう願望が働きます。メディアは社会の願望にあがいません。むしろ従属しながら煽ります。その結果、善悪に振り分けます。オウムの事件をきっかけにこのことがとても進行しました。簡単に言うとテレビを間にはさんで、テレビで向こう側の悪、テレビのこちら側の善、そのパーセンテージが激しく上がります。悪が上がればこちら側の善も上がります。つまり、自分たちは無辜の市民で、彼らは強暴な加害者である、という構図ができあがります。ある意味安心ができる。あんな凶暴なやつたちと自分たちは違うのだと、普通であることを認めたくない。

オウムの事件で僕らが学ぶべき点があったとしたら、あれほどの善良で純真優しい彼らがなぜあれほど凶暴な、凶悪な事件を起こしたのか、それを考えることでしょう。でも結果的に

はメディアは、この社会はそれを拒絶しました。「強暴、凶悪だから」、もしくは「洗脳されていた」、そういう論理に回収しようとした。その結果善悪の二元化が進みます。

もう一つ、オウムの事件は後遺症を残した。特に地下鉄サリン事件がそうなのですが、不特定多数の人たちを対象に事件を起こしたことです。つまり95年3月10日の午前8時過ぎの営団地下鉄に乗っていたら誰でも被害者になる可能性があります。自分の家族が被害者になるかも知れない。つまり遺族になるかも知れない。それまでの犯罪では恨みであったり痴情であったり金銭的な問題であったりと、一応の被害者と加害者との間に一定の相関関係があったわけですが、オウムの事件はそれらがまったくない。その場に居合わせたら誰もが被害者になる可能性があった。つまり被害者感情の共有化です。自分も被害者になる可能性があったわけだし、当然加害者を憎んでも憎みきれない存在なわけです。加害者に対する憎悪がとても強くなります。その意識が一年以上の報道で日本全国に植えつけられます。

## なぜ地下鉄にサリンを撒いたのか

もう一つは動機の不確しかさです。じつはまだ彼らが**なぜ地下鉄にサリンを撒いたのか**、その理由をまだ僕らは獲得できていないのです。裁判では間近に迫った強制捜査の目を眩ますためにサリンを播いた、ということに

なっています。たしかに麻原の一審判決においては、「警察の強制捜査をかわすため」、ということと「自らが独裁者として君臨する専制国家をつくるため」にサリンを播いた、となっています。この二つの理由が並列しているのです。だがこの二つは並立するはずのない論理です。そこからおかしいのですが、警察の強制捜査の目をくらませるため、というのがよく考えたら、本屋さんで万引きがばれそうになったので店員を刺し殺しました、というような論理ですね。明らかにバランスがおかしい。やはりどうもわからない。

## 理由がわからなければ 不安は募る

なぜ彼らがサリンを撒いたのか、なぜ不特定多数の人を大量殺傷しようとしたのか。その理由がどうも分らない。動機が分からないことは怖いですよ。ということはたとえば皆さんが帰宅するとき、あまり縁起でもない設定ですが、暗闇でいきなり背中を刺されたとします。幸い軽症で、すぐに病院で手当を受けているときに警察から電話がかかってきて、「犯人を捕まえました。ただ、なぜあなたが刺されたかわかりません」と警察に言われたら、安心できないですよ。

なぜ刺されなければならなかったのか、自分では気がつかないうちに犯人に恨みを買うようなことをしてしまったのか、あるいは犯人が他の人と間違えた人違いだったのか、刺された理由が欲しいですよ。それが分

らなければいつ同じことが起こるかわかりません。不安が続きます。つまり同じ道を歩いて帰れません。犯人が捕まったとしても安心ができない。オウム事件はこのことを日本社会によりスケールアップした形で残しました。夜道が歩けないのです。こうなったら人はどうするか、自分を置き換えて考えます。

夜道を歩かなければ家には帰れない。でも夜道は歩くのが怖い、いつ何どきまた刺されるのではないかという不安がぬぐえない。その場合自分はどうかを考えます。まずは武器を持ちたくなります。護身用ですが、武器を持つときは、いざというときは自分も戦うという決意を持たなくてはなりません。一番いいのは誰か自分より強い人に守ってもらいたいという気持ちが強くなります。

次に考えることは一人では怖いので大勢で行動する、同じ方向の人たちが時間を合わせて皆で駅に集合して皆で一緒に帰りましょう、ということ、つまり集団下校という発想になります。その分恐怖感は薄まります。知らない者同士でもそのうちに気心が知れあって「今度の日曜日にバーベキューやりましょう」、「カラオケに行きましょう」という関係になる。そのうちにチームの名前を考えましょう、お揃いのTシャツか何か作りましょうか、旗か何かあればもっと目立ちますよ、俺はギターを弾けるからチームの歌を作詞、作曲しましょう、と。これが95年以降の日本社会の流れですね。

先ほど絵鳩さんが仰っしゃっていましたね。小渕内閣のとき99年の国会で、まずは国旗、国歌法案、これが成立します。次に通信傍受法案、住民基本台帳法案、そして有事法制、ガイドラインです。これらは全部、どれをとってもそれまでであれば、国会を解散するほどの議案ですよ。それらが全部圧倒的多数で成立します。

さらにこの年、もう一つの動きですが自民党が憲法改正調査会をつくります。これらは全部99年のことです。オウム事件から4年目の時期です。痛みというのは少し時間をおいてやってくるのです。実感として……。オウムに対する排斥運動が一番強くなる時期です。このような法案が通り、憲法も変えようという動きにつながるのには「集団化」の考え方です。みんなでまとまろう、一体化しよう、ということです。つまり一人では怖い、武器を持ちたいが自分ではできない。誰かに武器を持ってもらおう、強い者に守ってもらおう、と考える。誰が強いのか。それが国家ですね。確か国家は武器を持っている。その武器をちゃんと使えるようにしたい。強い国になろう、強い集団になろう、とだんだんこのようになっていくのですね。

## 理由のわからない不安への対処は？

保守化とか右傾化という人がいますが、僕は少し違うのではないかと思います。右傾化という場合は疑似右傾化で、法律は集団化、皆でまとまろう、

団結しようという意思がとても強くなります、この15年間は……。

集団としてまとまりたいときに、人はどうすればいちばん集団として実感を持てるか。それは集団から外れたものを見つけることですね。異物を探す。異端を探す。自分たちがまとまっているときに自分たちと違うものを見つければ、それは自分たちにとって敵である。排除すべき存在である。そういう人たちを攻撃するときに自分たちは多数派で連帯できる。だから安心できる。そういう気持ちがとても強くなるのです。2000何年でしたかイラクで3人のボランティア方がサマーワで捕まったとき、「自己責任」という言葉が一斉に流布されて、あいつらは共同体のルールに違反したのだから当然だという、そういう風潮がありました。あるいはその翌年ですか、**「KY」**という言葉がはまりましたね。「空気を読まない」ということらしいですが、「空気を読む」ということは場に従うということです。場に従うことが当たり前で、従わない人は異物ですね。そういった風潮がとても強くなりました。

日本社会はもともとその傾向がとても強くあります。つまり日本的な村落共同体的な規範、というような共同体への帰属意識いうものがとても強くなります。それがオウム以降、とても強くなりました。その強くなる過程の中で、不安と恐怖を必死に紛らわそうとしている。

お化け屋敷というものを考えてみ

てください。年配の方はお孫さんを連れて行かれますよね。いい歳をして今でも僕は足がすくむんですね。何で足がすくむんだらうね。と考えました。まさか本当のお化けだとは思っていないんです。お化けがいるとは思っていないのですが、なんだかちょっと怖い。お化けはいないことは分かっていますが、なぜ怖いのか、を考えてみました。これはお化けが怖いのではなく通路が怖いんですね。つまり、あそこに通路を曲がったときに大学生が変装して立っている、その先にはマネキン人形の首が転がっていることは分かっている。そのことが分かれば怖くないのです。ですがそれが分からなから怖いのです。つまり、分らないと怖い、見えないと怖い、だから夜の海とか夜の森とかは怖いのです。夜の海は怖くて泳げませんね。見えないからです。見えない恐怖をもったとき人はどうなるか。それは見たくなるし、知りたくなるし、聞きたくなる。不安、恐怖の存在がそうさせるのです。

## 殺人事件は減少 — 日本の治安は悪化していない

オウム以降、治安はとて悪くなっている。犯罪はとて多発している。不審者もとて増えている、と思う方は手を挙げてください。そう思わない方は手を挙げてください。あれッ、思わない方は手をあげてください。予定が狂いましたね。(笑)

どこの会場でも悪くなったということに半分くらいは手を挙げるので、

ここぞとばかり「それは違いますよ」と言おうと思ったのですが、さすが今日の会場の方は質が高いですね。ですからいまさら説明するまでもないことかも知れませんが、治安は悪化していません。数値を挙げれば去年一年間、警察庁が発表した殺人事件の認知件数は1097名です。「認知件数」というのは警察が受理した件数ですから、未遂とか、予備罪とか、実際には自殺だったとか、無理心中だったとかも全部含まれています。それらの、必ずしも「殺人事件」の範疇ではないものを除くとおそらく昨年1年間で600件くらいだろうと思われます。公式的には1097件です。1097件だけを取りだして評価をしてもわかりません。そこで戦後の殺人事件の推移で考えると、去年1年間の1097件がどんな位置にあるか、というとそれは戦後最少です。昨年1年間は日本では戦後、殺人事件が最も少ない年だったのです。

一番多かったのは1954年です。3081件です。今は人口がかなり増えていますから、人口比で言えばピーク時のほぼ4分の1です。54年はどんな年だったかという、「3丁目の夕日」の年です。貧しいなりに皆で手を取りあって前向きに希望を持って生きてきた、あの時代です。あるいは安倍信三が「美しい時代」と言った、その時代に一番殺人事件が多かったわけです。

治安が悪化しているか、ということですがいま、大きな駅や人通りの多い

ところで「いま、治安が悪化していると思いますか」と聞けば、おそらく3人に2人位は「最近はぶっそうで、…」というような意見が聞かれますよね。なぜそうになってしまうのかですが、それはメディアです。メディアは煽るからです。なぜ煽るのかといえば、煽った方が視聴率がいいし、部数が伸びるのです。

5年くらい前ですがTBSの「アクセス」というラジオ番組に出演しました。今はやっていないようですが、テーマを決めてディベートするという番組です。その時のテーマは拉致問題でした。ちょうど横田めぐみさんの遺骨のDNA鑑定の結果が出たとか、北朝鮮の「ミサイル実験」が行われたとか、万景峰号の入港阻止とか、一連の騒動があった時期です。対談の相手は神浦元彰さんという軍事評論家です。皆さんもテレビで見ている元自衛官の軍事評論家とパーソナリティがいて二人で話したのです。神浦さんはラジオの経験がなかったようで、興奮しているのです。生放送です。スタジオに入るなり、神浦さんがプロデューサーに質問しているのです。「本当に何しゃべってもいいのか」と聞いているのです。プロデューサーが「いいです」と答えても、「本当にいいんだな！俺は責任とらんよ！」と何度も念を押しているのです。僕はそれを聞いていて、彼は今日は何をしゃべるつもりなのだろう？と思いました。

彼は何が言いたかったのか。本番が始まりまして、まずこう言いました。

そのころ北朝鮮が攻めてくるのではないか、というようなことを言い合っている時期でした。彼は「いま、北朝鮮の軍隊が攻めてきても何らおびえる必要はありません」「兵器は旧式で、兵隊の士気は下がりっぱなしで、石油の備蓄もほとんどない」「あれは軍隊とは言えません」「米軍の力を借りる必要はありません、日本の自衛隊の10分の1の力で蹴散らせます」と言った後にさらに「そもそも攻めてきません」と神浦さんはラジオで言いました。



## 危ない！と、視聴率が上がる

番組が終わった後ビールを飲みに行きました。彼は私にビールを注いでくれないながら、「森ちゃん！俺は今日はスッキリしたよ」「テレビではこう言えないんだよ」と言いました。「テレビでこれを言うと干されちゃうんだよ」とも言いました。先ほども言いましたが、「危ない」と視聴率が上がります。「危なくない」というと視聴率は下がります。「危ない！怖い！」というコメンテーターは使われます。「危なくない」というコメンテーターは使われなくなります。テレビだけではないんですね。新聞、雑誌などもみんな同じですね。ただ、テレビが一番激しいですね。視聴率が毎日出ますから。いま、この会場のどこかで「危ない！」と誰かが大声で叫んだらこんな話をしている場合ではないで

すよね。まず、「逃げろ！」となりますよね。

慢性的に恐怖感をもってしまうと「危ない」とか、「怖い」とかいうことが感情的になっていけば、過剰に反応するのです。特にオウム以降、街のところどころに監視カメラがあり、「不審者に注意」ということが当たり前のようになっていて、お巡りさんがあちこちに立っていて職務質問している、これが日常風景になっています。

こう言う状況で人は安心できるかという、逆なのです。逆に不安感が強くなるのです。そういった時にメディアはどうするか。煽ります。だから日本を右傾化しようとか、保守化しようとか、もう一回戦争を起こそうとか、そういうことは何も考えていません。ただメディアは単純に、視聴率を上げたり、販売部数を増やしたりするというメカニズムの中で自然に不安を煽るのです。



## 戦争のときもそうだった

今だけの話ではないのです。昔からそうなのです。第2次世界大戦、15年戦争が始まる前に、当時は新聞しかなかった。大阪朝日と朝日、東京日日

などは、最初は満州進出に対しては極めて批判的だったのですが、どんどん部数が落ちたのです。在郷軍人会などが騒いで東京日日が少し好戦的な記事を書いたら部数が伸びた。大阪朝日がそれを横目で見ながらもそれを少し書いたらやはり伸びた。そこに関東にしかなかった読売が入って三つ巴です。気がついたら「肉弾三勇士」とか「100人斬り」とかいう記事が紙面を飾り、そのあたりから軍部の検閲が始まります。

つまり最初から軍部の検閲があったわけではないのです。それはメディアです。しかし一概にはメディアを責められません。テレビ局にしても新聞社にしても、基本的には民間企業です。営利企業です。利益を求めることは当然、否定できない。ですが、結果としてその利益を求めることが不安と恐怖を煽ってしまうのです。

結果としてオウムはそういう状況をより強く刺激しましたよね。敵を見つけたい、安心したい、そのためにつねに敵を発見したい、見たい、聞きたい、そういう気持ちが強くなります。この気持ちがどこかに向いたときが「仮想敵国」です。僕が子供のころは、仮想敵国は圧倒的に旧ソ連でした。当時旧ソ連は日本に向けて核弾頭を装備したミサイルを何千発も配備していました。今の北朝鮮の比ではないのです。でも、危険かどうかと言われたら、今の北朝鮮への不安感の方が強いでしょうね。意識が過剰になっている。この意識が内側に向いたとき、そのタ

一ゲットが犯罪者です。

先ほど言いましたように善悪二分化が進みました。ということは、例えは不謹慎であります、例えばかつてであれば人を一人殺した場合は懲役15年、それがあある意味で相場であったのがいまはそれでは納得できないのです。より重い罰を加えるべきだとなっています。なぜならば「悪」が肥大化しています。そういう気持ちに当然なってしまいます。ですから、死刑を含めて厳罰化が進行します。

## 厳罰化から寛容化へ

### —北欧の動きを参考に—

1990年から95年頃の統計と2000年から2005年の間の統計で見ると、全国の裁判所の一審、二審、三審含めて死刑判決が3倍に増えました。2005年までの統計ですか

ら、今はもっと増えています。最近死刑が何かと話題になるのも厳罰化です。これは日本だけではありません。世界全般の傾向です。アメリカも特にそうです。そう考えたら日本もアメリカも先進国で唯一死刑存続国です。尚且つ二分化が共通しています。9・11以降いろんなことが共通しています。

これから映像を見てもらいます。昨年ノルウェーに行きました。NHKの番組のロケでした。いま話した厳罰化が世界の傾向といいましたが、北欧は違うのです。北欧では寛容化がどんどん進んでいます。特にノルウェーです。なぜ今、この時代において寛容化政策を進めるのかということを描いていまして、全体で70数分の映像ですが、ノルウェーの刑務所を2カ所取材した場面だけ見てください。

\* 本文は次号に□きます。予定

次回の「神奈川証言集会」(市民活動フェアに参加して証言集会を開催します)

場所：かながわ県民センター (各日11:00~映像、13:00~証言)

日時：3月12日(土) 305室 <証言者>坂倉清さん(90才)

13日(日) 111階コミュニティ1 <証言者>絵鳩毅さん(97才)